

Presented by Stardust Books



創星

Vol. 10

Take Free★

星 屑 書 房

Presented by Stardust Books



Take Free★

星 屑 書 房

目次

- 02 *短歌十首 春の日のドキンちゃん 竹中 優子
03 無題 詠人不知
04 PE TO ME 間々 えいよ
09 be in the dreamscape 衣空
14 馬場貴生短編 馬場 貴生
17 サブカル対談 一路 真実 × 竹中 優子
22 ★創星10号記念企画★ メンバー紹介
33 独奏 坪井 希
39 猫しかないけど マチコ・ラスメニーナス
40 クラシック音楽教養のお時間 天沼 太郎
43 恋遊 一路 真実
50 Philosophy of Stardustbooks
51 編集後記

表紙担当・・・To' s job
裏表紙担当・・・松田 貞幸



*短歌十首

春の日のドキンちゃん

切りがないままにしている 春の日のドキンちゃんなら笑ってくれる

雨音が電話の音にひとつずつ変わる真夜中ねむりにおちる

神様のように上手な相づちを打つ係長の下で働く

(保存しない) を選択するね いったってやさしいふりをしているふりで

亡霊か何かと思ひ触ったら生きてる男だから困った

トイレットペーパーひとつ握りしめ二度と会わないつもり笑顔

電話にて内示を受けた日の夜に海岸線に生まれる風よ

居心地がまあまあ悪い鳩の巣の中で目覚めた弟の春

まばたきをする間の間よ リビングを横切る影はおそらく忍者

理解してほしいと思う真緑に重い身体を染め抜いていく

竹中 優子

無題

よみびと知らず
詠人不知

迫りくる時計の針に責め立てられ、急がば回れと脳みそをフル回転していた小生は、あまりの緊張感と疲労により気が付けば朝を迎えていた。

夜明け前の暗闇から抜け出し、眩しい太陽の光りを浴び、新しい朝が来た、希望の朝だ、ははは、寝ぼけまなこで雀がチュンチュン鳴いてるよ、こりやあく。ぬぬっ？何処からともなく聴こえてくる軽快なピアノの伴奏。それに伴うおっさんのアナウンス。腕を前に大きく上げくえく背伸びの運動からくあく、はいっ！！

は、はいっ！？…そうなのだ。朝を迎えておったのだ。ぬけぬけと朝を迎えておったのだ。現時点でそこにあるのは、真っ白な原稿用紙と頭真っ白な小生の不甲斐なさ、阿呆面、貧困、迷走…。

えくつと。星屑書房の編集長から電話があったのが昨晩。「詠人先生、ご無沙汰しております。今回の創星原稿の件ですが、執筆の方は進んでおりますでしょうか？締め切りは今夜じゅうに、もう一度お伝えしておきます、今夜じゅうに

…！！

こんなくるに、おらのあたまはこんにやくるに。ワンツーサンシー！

ババンババンバンバン、アビヤビヤポポババンババンバンバン、アソリヤソリヤソリヤソリヤ。

ありやく祭りば行われておるでえく。活字の若い衆さくふんどししめてからにいく神輿ば担いでく作品をこしらえとりますくがな。

つずきましてくナニコレ2014ウインターコレクション

ン！シラズヨミビト！パチパチパチパチ！言わずと知れた知らずと詠まれたナニコレデザイナーシラズヨミビト氏からの今期の渾身の一作は、一昨で終わらず逸策でつぎはぎだらけのような裸一貫出たとこ勝負、まさにナニコレにふさわしい奇抜なアイデアと足りない脳みそ、読者のみならず、星屑メンパーまでも苦笑な相変わらずの、まがい物、色物、色気、色鉛筆。その他色々でお送りしておりましたが、残念ながらお時間が来てしまいました。というかとつくに遅れておりますので、いか仕方がない、かたじけない、それでも小生はくじけないのでくあくります。では皆様のご健康とご発展をお祈り致しまして、最後は全員であれですね。一人もいない詠人ファンならもうわかってるよね。せくの。

つずくく！？

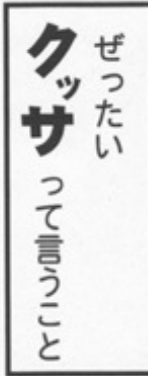
半分ねこで
半分人間
いろんな事が半分だけど
いろんな人と出会って
暮らしています



ピィとミィ

PE TO ME

間々えいよ



なぜだろう？



ムリだね

……



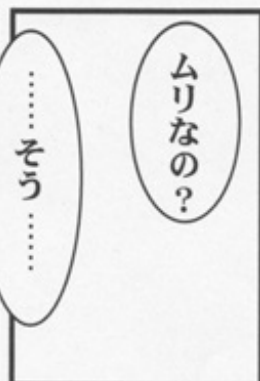
ぼあちゃん
博士

ん？

ボク人間に
なりたいんだ
けど



人間み・た・い・に
な・れ・る・け・れ・ど
人・間・に・は・な・れ
な・い・ん・だ・よ



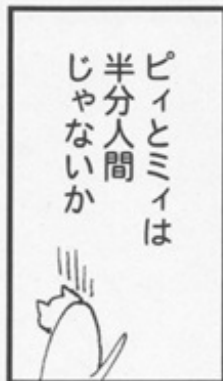
ムリなの？

……そう……



他人なんかより

自分に目を
向けたらどう？
……だって



ピイとミイは
半分人間
じゃないか

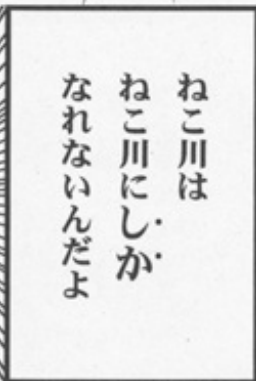


どんでん?!



……ボク
鹿にしか
なれないの？

おお、ねこ川、どうか
君はそのままです。

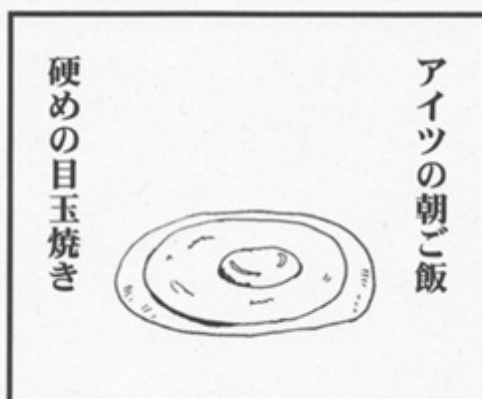


ねこ川は
ねこ川にしか
なれないんだよ



今日の失敗
笑ってくれないか
「笑い話」にさせてくれないか





まさかの一言で
論争は続くのであった。

be in the dreamscape

衣 空

-bizarre-

幼い頃の自分の夢を見た。

学校の授業が終わり全速力で家に帰り、玄関先にランドセルを放り投げて、遊びに行つてくると居間か台所にいる母親に大きな声で言った。いつもならランドセルくらい部屋に置いて行きなさいと怒鳴られるのに、その夢の中では母は何も言わず、私も気にせず家を出た。

家から力いっぱい走つて五分程度の距離にある公園へ向かう。学校の友達と遊ぶのはいつもその公園で、家が一番近かった私は必ず一番に到着してブランコに乗つて皆の到着を待っていた。

まず公園についていたのはシゲさんとよっちゃんとの二人だった。よっちゃんが持っていたサッカーボールでどちらからともなくボールを蹴り始めるが、私がブランコで遊んでいることには気付かない様子だ。間もなくマリちゃんとタカちゃんもやつて来て、シゲさんとよっちゃんにおおいと声をかけた。しかし、マリちゃんとタカちゃんも私に気付かない。

そして最後に一人でやつて来たのは、私と一番仲が良かったマコだった。いつもの顔触れが集まったが、一番仲良しのマコすら私に気付かず、誰も私に声をかけてくれない。私はブランコを降り、皆のそばへ駆け寄り四人が顔を寄せ合つて何を話しているのか耳を澄ませた。

「今日は何して遊ぶ？」

グループをまとめたり、話し合いを仕切つたりするのはいつもシゲさんの役目だった。

「サッカーやろう、サッカー！」

サッカーボールを持つて来たよっちゃんは、将来絶対にプロ選手になると公言して憚らないサッカー好きだ。

すると女子のマリちゃんとタカちゃんが不服そうにええっと声を上げた。

「サッカー好きなの、よっちゃんだけじゃん」

自己主張の強いマリちゃんは嫌なことは絶対に譲らず、マリちゃんと仲のいいタカちゃんはそれに同調してそうだよと言った。

「かくれんぼとか鬼ごっこかにしようよ」

タカちゃんが提案すると、ずっと黙っていたマコが突然人差し指で集まった仲間の人

数を数え始めた。

「マコ、何してんの？」

シゲさんが目ざとくマコの行動に気付いて尋ねた。マコは真面目な顔で答える。

「一人足りないよ」

足りなくないよ、と皆が口々に言った。

「何言つてんの、ずっと五人じゃん」

「あれ、もう一人いたのに」

六人いるよ、だって私がここにいるじゃん、必死でそう言いながら私は皆の周りを走り回つた。マコ、ちゃんと合ってるから無視しないでよ、マコの背後で私は叫ぶ。

するとよっちゃんが持つていたサッカーボールをマコに投げつけた。

「お前、ケイちゃんのこと言つてんの？」

私はマコの隣でよっちゃんに向かつて大きく頷いた。

「あいつ死んだじゃん」

四人はマコに向かつて、霊が見えてるんだとふざけて騒ぐ。マコはそうかもねと言つてきまりが悪そうに笑い、オレもサッカーがいいなと言つて投げつけられたまま転がっていたボールを蹴り始めた。

-brutal-

その人物は腰ほどの高さの壁の上に軽々と上り、しゃんと背筋を伸ばした。無造作に項まで伸びた髪が、ビルの屋上を吹き抜ける風に乱されるのを見ていると、その人物の正体は男かも知れないがひよっとすると女かも知れないと思つた。職業も年齢も何一つ私には分からない。

壁の向こう側にはビルが立ち並び、夕陽がその陰に今にも沈もうとしている。逆光で服の色も判別できない後ろ姿は全体が影のようだ。

人影は徐に両腕を肩の高さまで持ち上げると、体ごと風に揺られ始めた。体が右に傾いたかと思えば、ゆっくり反対側へ揺れ、前のめりになったかと思えば、私の方へ倒れてきそうになる。

私は手をいっぱい伸ばしても、僅かに届かない場所に立って、今にも倒れそうで中々どの方向へも倒れない人影を苛立ちながら凝視していた。危ないから助けようとも、そこから降ろさなければとも思わない。決して

自らは下さないが、今この瞬間に、私の目の前でビルの屋上から転落して死ねばいいと思うほどに憎んでいた。私の目の前にいるこの得体の知れない人影は、私の最愛の人を殺したのである。私の憎悪の念が強まるほど、風は強くなり、影は柳の枝が風に揺れるように大きく揺れていた。

痺れを切らした私はその後ろ姿を、立て続けに罵倒する。

「飛び降りろ、早くやれよ、止めてもらえらなくても思つてんのか、今すぐ死ね」

私が言葉を一つ発する度に風が強くなるようだ。そして風が吹き抜ける度に私の感情は高ぶり、声も大きさを増してゆく。人影は風に煽られ相変わらずゆらゆら揺れているだけで、それが目障りで堪らなかつた。

「早く死ねって言つてんだよ、ほら、そこから飛び降りるだけだろ、簡単じゃないか。お前があの人を殺したんだ、死ねよ、死ね、死んで償え！」

声は段々激しさを増し、もはや感情を抑えることができなかつた。私の憎しみに塗れた言葉で陽炎のように揺らめいているだけの

人影を突き落せるような気がしていたのだ。

夕陽がビルの影に姿を隠す。私の目を眩ませていた日差しが弱まり、知らぬ間に辺りが暗くなつていた。すると薄暮の闇に紛れてその人影が私に背を向けていたのではなく、私の方を向いていたことに気付いた。その顔には見覚えがある。私の愛する人を殺したのは、私も知っている人物だったのだ。

まるで鏡と向かい合っているようだ。壁の上に立ち、風に煽られて揺らめいていたのは、ほかならぬ私だった。

「お前がやつたんじゃないか」

もう一人の私は侮蔑の入り混じつた言葉を自分自身に吐きかけた。

罵る言葉も忘れ、呆然と立ち尽くす私を、頭の天辺から爪先まで舐めるように見た私の分身は、微笑の真似事をするように醜く顔を歪めながら、両手を広げたまま背後に倒れ、ビルの向こう側へ姿を消した。

私は一瞬差し出そうとした手を引っ込めた。もう遅い、何もかも手遅れだ。

-blue-

鏡に映った自分の姿を見て、ああ私は死ぬのだなと確信する。茫漠としたものではなくすぐ目の前に迫りくる死は、私の瞳を深い深い青色に染めた。穏やかな青、涼しげな青、静寂の青、次々と私を包み込み、私の目にはすぐ手の届くところにあつたはずの鏡の輪郭すら判然としない。ただ真つ青な闇が私の視界を覆い尽くした。

体の真ん中から熱が奪われてゆくのを、遠くの意識と共に感じる。私をすっぽり包んだ青い闇の中は凍えるほど寒く、冷たい。すっかり体温を奪われた指先を目の前にかざすと血の気が失せ、今にも青に同化しかけていた。このまま私は青い闇と溶け合い、死体も残らずにこの世から消え去るのだろうか。しかし恐怖はなく穏やかな心持だった。私はこのまま死ぬ、死ぬのだと呪文のように頭の中で繰り返して、静かに目を閉じた。私は海の底へ沈みゆくのかもしれない、或いは大地を遠く離れ空に吸い込まれてゆくのか、私の体を支えたりその場に留めようとしたりする力

は何一つ存在しないようだ。

不意に首筋に温かみを感じ、目前に迫っていた死が遠のいたようだ。まだ私の体は消えてはいなかった。それは私の首筋を撫で、髪に触れ、右の頬を包み込んだ。私は閉じていた目を開き、私の意識を蘇らせた物が何なのか確かめようとした。しかしそこには相も変わらず青い闇だけが広がっている。それでも確かに首筋には何かが触れていた。私以外に何も存在しなかった筈の青い闇の中で、何か得体の知れない別の存在に気付いたとき、死に対してすら抱かなかつた強い不安が湧きあがった。

冷え切って幾ら力を入れようとしても、全身から力が流れ出てゆき、思う通りに動かない体を必死に動かし、首筋に触れる物から逃げようとした。しかしそれは執拗に私の体に絡みつき、愈々私は指一本動かすのもままならなくなつた。

首が徐々に温かくなり、それまで感じていた冷感とは打って変わって、私を不安に陥れる。私が死ぬことに恐らく変わりはないが、青く冷たい世界で独り穏やかに死にゆくのだ

とは違う。私とは違う何物かに殺されるのだ。私を包む青が見る見るうちに不穏な様相を帯び始めた。不吉な青、冷酷な青、死を暗示する青。

殺される、殺されると頭の中で繰り返される。時折それを打ち消すかのごとく、自分のものとは違う声で殺してやるといふ声が出て、青い闇に守られていた静寂が打ち破られた。私は青以外に何も見えない目を凝らし、そこに何かがあるのか見ようとした。

殺される、殺される、殺してやる、殺してやる、殺してやる、殺される、殺してやる。繰り返される度に二つの声に違いがなくなるようだ。声は少しずつ大きくなり、私を拘束する青い闇は急速に熱を持ち始めた。そして凝らした目の遥か先で小さな小さな光が瞬く。

私を包み込んでいた青い闇を振り払おうと、腕がちぎれるほど、脚がどこかへ飛んでいくほど振り乱す。穏やかさも爽やかさも、涼しさも静けさも全て、青い闇と共に、跡形もなく夢のように私の周りから消えて行った。

自分が死ぬ夢を見た。夢で三度死に三度生き返った私は、頬に触れるすべすべした枕と、体温で暖まった布団に「生」を感じ、幸福を覚えた。生きている、私はまだ生きていたのだ。死にたくなかった、悪夢の中ですら。

しかし意識がはつきりするに従って、項に疼くような痛みを感じ、徐々に遠のく幸福感に追いつがるように視界がはつきりし始めた。部屋が薄暗い闇に包まれているのは、まだ夜が明けないのか、日差しがカーテンで遮られているせいなのか、時間は気にかかったが時計を見る気は起らない。項に感じていた痛みが頭全体に広がり、枕元の携帯電話を見るのも億劫だ。

暗闇に目が慣れてくると、私は周囲に小さな異変を感じた。確か眠りにつくときにはベッドの上に私ともう一人、私の愛する人が眠っていたはずだったが、どこにも姿がない。頭痛は瞬きをするだけでも痛みを増すようだが、私はじわじわと寝返りを打ち背後の様子を窺う。しかしやはりベッドの上にいるの

は私独りだけだった。

何か悪いことが起きた予感がした。ますます酷くなる頭痛に加えて吐き気に襲われる。体中からじつとりと汗が滲み出て、今まで私を温かく包んでいた布団は、汗で湿気を含み、生臭い異臭が鼻を突いた。

共に眠りについたはずの愛する人を探そうと体を起こすと、頭がい骨を力いっぱい締め付けるような頭痛に襲われ、そのまま体をベッドに横たえた。この頭痛の原因が何なのか私には見当もつかなかった。見続けていた悪夢が愈々現実のものとなるのだろうか。私はこのまま本当に死ぬのかもしれない。

今はまだ薄暗い闇の中だ。きつともうすぐ夜が明け、部屋には光が差し込んでくるだろう。今は起き上がることもできないが、明るくなれば頭痛も治まっているに違いないし、愛する人も元通り私の横で眠っているはずだ。これもまた夢なのだ、これが最後の悪夢であるようにと、私は祈るように目を閉じた。目を閉じて間もなく、体を押し潰されるような重みを感じ、恐る恐る顔を開けた。目の前には眠りに落ちる前に姿の見えなかった私

の最愛の人が横たわり、大きな目をいっぱいにかけて私を見つめ、腕を私の体の上に乗せている。恐らく目が覚めてトイレに行っていたか、喉が渴いて何か飲んでいただけなのだ。私より先に目覚めて、私の寝顔を見ているのが好きだと、いつか話していたのを思い出した。相変わらず頭痛も吐き気も治まらず、汗を吸った布団の湿気も、そこから発せられる悪臭も消えていなかったが、愛する人はそばにいる。言葉は交わさなかったが、永遠と感じられるほど見つめ合い、閉めたカーテンの隙間からは暖かな日差しが漏れ、私はやはり生きている。これが現実だ、悪夢はもうどこか遠くへ行ってしまったのだ。

私は今、とても幸福だ。

馬場貴生短編

君はまだ走るのか 馬場貴生

ダイエットのために始めたランニングが効いたのか、少し痩せ始めたと同時に宗介はランニングが楽しくなってきた。

その日も近所のお決まりのコースを走っていた。

すると、どこからか声が聞こえる。

「うーん、うーん」

辺りを見回してみたが朝が早いので誰もいない。

それでも聞こえるので、よく耳をそばだててみると、足元から聞こえる。

よく見ると、声は靴から聞こえた。

いや、正しく言うと靴ひもであった。

「助けてください。きつく結んであつて苦しいのです」

夢でもみているのかと思つたが、実際に靴ひもが宗介に助けを求めていた。

宗介は仕方なく、結びを少し緩めてみた。

「まだまだ苦しい。まだ、まだです。うーん」

靴ひもに言われるがままに緩めると、ついにひもはほどけてしまった。

「いやあ、ありがとうございます。これで楽になった」

「それはいいが、君がほどけてしまう

と、ぼくは走れない」

「そんなことは知りませんよ。あなたは命と走るのとどちらが大事なんです」

「君はひもだろう！」

仕方がないので、宗介はその日は諦め、帰宅した。

家で代わりのひもを探すが、どのひもも結ぶと苦しんでしまふ。

靴ひもは言う。

「我々の声が聞こえるようになったあなたは、もうひもを結ぶことができないな」

冗談じゃないと宗介は思った。

ただ走るだけの自由も許されないのは我慢ができない。

怠け者だった自分にもできることをやっと見つけたのだ。

するとまた声がした。

「私を使ってください。私は少しのことでは苦しくなんかはなりませんよ」

ゴムだった。

ひもほど固定はできないが、ないよりはましだと思い、宗介はゴムを靴に当てた。

もともと伸びるようにできているゴムは、苦しがりたりはしなれないと思われたが、しばらくすると苦しみ出した。

「く、くおおお…」

そして次の瞬間、聞いたことのないような断末魔とともに、ゴムは切れてしまった。

それはとても苦しそうな断末魔だっ

た。

ゴムとはいえ、命を奪ってしまったことに對して、宗介は心を痛めた。と同時に、この先どうやって走って行こうかと、頭を悩ませた。

家に帰ると、今度はガムテープが話しかけていた。

「あつしを使っておくんせえ」

宗介はガムテープの言う通りに使つて見ることにした。しかし、手にとつてちょうど良い長さを手でちぎったとたん、ガムテープは叫び声をあげた。

「いてててえ！ いえ、大丈夫でございます。まだまだたくさんありますんで」

宗介はガムテープも諦めた。

そもそもテープで靴を止められるはずもない。

宗介は走りたかった。

いまや宗介の耳にはありとあらゆるものの声が聞こえてくる。その全てに耳を傾けていては、宗介は生きていけないと思つた。

正直うんざりしていた。

宗介はおもむろにひもを手に取り、思い切り靴に結びつけた。

「ぎゃあ——！！！」

ものすごい叫び声が聞こえたが、宗介はそのまま強く縛つた。

宗介はものすごく残酷なことをして

いるかのような錯覚に襲われたが、紐の叫びを聞こえないふりをして通した。そのうち叫び声はやんだ。

そして宗介は走りに出た。

宗介の耳には以前としてあらゆるものの声が聞こえていた。

捨てられたペットボトル。

破かれたチラシ。

落し物の軍手。

全ては泣き、苦しんでいたが宗介は無視した。

宗介は走り続けた。

怪我をしたりしたが、ダイエットは成功した。

そののち、また太ってしまったが。

弁当 馬場貴生

昼休みに久美子は弁当箱を開けた。

すると中身は空っぽで、何も入っていないなかつた。

代わりにもくもくと煙が出て来て、中から魔人が現れた。

私は弁当の魔人。どうぞ、好きなメニューをお申し付けください」

久美子は考えた末、ステーキが食べたい」と言い出した。

魔人は「かしこまりました」と言って消えてしまった。

しばらくすると、再び魔人が現れて、手には弁当を持っていた。

「どうぞ、お待たせしました。買って来ましたよ」

「バシリじゃねーか」

久美子はつつこんだ。

しかも弁当は、唐揚げ弁当だった。

「売り切れだったんです」

「使えない魔人だと思った。」

星屑書房の年表



★2008年11月「創星」1号作成。

最初は、色んなタイトル(案)がありました。。。

★2009年1月HPを開設する。

創星を置いてくれるお店を探すため、
カフェめぐりをしました。

★2009年11月初めてブックオカー箱古本市に参加する。



★2010年10月 竹中(鳩山)の仕事が忙しすぎて、星屑書房の活動がピンチになる。

最低限の手間で創星を作る方法を色々考えました。

★HPを見て連絡をくれる人が徐々に現れ、新メンバーや創星を置いてくれる場所が増え始める。



★2011年 一路&竹中 お互い東京と大分に転勤になる。

2014年7月 お互い無事に福岡に帰還。よくこの活動が続いたものです。。。

★2012年6月 福岡ポエイチに初めて参加する。

★2014年5月 FM福岡のラジオ番組「ラジ☆ゴン」で星屑書房を紹介してもらう。

東京と大阪で文学フリマにも参加しました。

★2014年8月読売新聞に星屑書房の紹介記事が掲載される。



★2014年10月「創星10号」が発行される。

これまでの星屑書房の

活動について語ります。

きっかけは「あきなだより」!

竹中：では、今回は創星の十号までの思い出を語るといふことで。

一路：まず、二〇〇八年十一月、創星一号を発行。

竹中：もう、六年になるね。職場の同僚として出会って。

一路：私の家で鍋を食べながら、「やろう!」とか言って始まったね。

竹中：食べたね(笑)あと、職場の残業時間になって建物の外で、三十分ぐらい長い時間席をはずして、百部にするかとか話したり。

一路：そうだったね。

竹中：元々は、社会人になったら文化的な活動をする場が全然ないっていうのと、お互いに東京から福岡に来て、そういう文化系の活動の場がないってところからやろうとした。やっぱり、あの「あきなだより」! 一路：そうだね。あれ、今まだ届いている? 竹中：それに近いものは来ているよ。

一路：私も、転職したにも関わらず、今の部署になって保険のお姉ちゃんから届くよ

うになって、懐かしく思っているんだよね。竹中：私は今でもうらやましいと思ってるよ。

一路：みんな読むもんね。休み時間に机の上に勝手に置かれている、営業のチラシなんだけど。保険のお姉ちゃんの手書きで、なぞなぞとか書いてあってね。

竹中：ちよっとしたイラストとか。健康情報とかも。なんたらティーを飲むと、目いいですよ、とか。

一路：最近、こんなことありましたっていうのとかね。

竹中：何だろうね。元々目指したものはあれだったんだよね。最近、それをよく考えたりする。

一路：みんなの目に触れて、ちよっとした時間で読めて、印象に残るものを読ませる。

竹中：結果的に、みんなゴミ箱に捨てるようなレベルのものなんだけど、意外にそのことが頭に残っていて、しゃべっちゃうみたいだね。

一路：午後、仕事の合間に話すよね。

竹中：あのクイズの答えさ〜とか言って(笑)影響力というか、楽しませたいっていう気持ちがあったのかなと。

一路：何か、隙間時間を埋められたって気がするんだけど。何かもう勝手に入ってくるもんね。

竹中：すごく中心じゃないってこともいいんだよね。お手軽で、まさに一路さんが言ったみたいに、隙間なんだよ。メインになつてまでって程じゃない。隙間だからこそ自由度が高いつて思うから。いまだにあの感じていたくなって、あの感じを指していたって思う。

一路：紙で作ると、ウェブ小説とかと違って、また違う発展があるんだよね。初めからそういう嗜好性の人たちの中で完結するわけじゃなくて、周辺の人に届けることができる。

一路：一箱古本市とか、古本を買いに来ている人が手に取って行くわけだし。

竹中：他にも、ジュンク堂に置いたり、カフェめぐりとかして配ったよね。

一路：箱崎の変なアジアの店に飛び込みで行ったりしたね。今もあの店あるのかな。

竹中：結構、四、五か所は営業して置いてもらったよね。あと、カフェのガイドブックを買って、それを一つずつぶつけていくとか。

一路：あー、やったね！ なつかしい。

竹中：そういう洒落たカフェが福岡にあるってことを知ることも楽しかった。

だけど、カフェとかだと、たくさんさばけるけど、持って行った相手の顔が分からない。そういうのもあって、一箱古本市とかポエイチみたいなどころで直接渡すっていうスタイルになった。

一路：そうだね。結果的に、イベントで配るっていうところに落ち着いた。

竹中：内容も、仕事と両立できるレベルに落ち着かせてね。

一路：お互いに異動もあったから、それでもやれる形態になった。

竹中：途中、すごい遠距離グループになったよね。日本を股にかける的な（笑）

何のためにやっているの？

竹中：私たちが読売新聞の取材を受けたときに記者さんに言われたよね。同人誌をなぜやるのか、なぜ読むのか、なぜ集まるのか。

一路：うん。

竹中：自分たち自身も、そういう気持ちは

あるよね。自分たちがやっていることだけど、誰がこれを読むのかな…みたいな気持ちはある。本当に文学作品を読みたければ、いくらでも安価にプロの作品が読めるわけだから。

一路：私も最近そのことを考え直して、ツイッターでつぶやいたりしたんだけどさ。Eテレでやってた「ニッポン戦後サブカルチャー史」の最終回で宮沢章夫が言ったんだけど、文化をいろいろに分けて、メインカルチャーの対抗として生まれたカウンターカルチャー、下位文化としてのサブカルチャーとか。歴史的にはそうだったけれど、今は、昔サブカルチャーと言われたものもメインカルチャーに組み込まれたり、またオタク文化みたいに何か別のものになったものもある。だから、現在のサブカルチャーって何かっていうところで、メインから「逸脱」したものでまとめてたんだけど。それで思ったんだけど、やっぱりメインの作家が書くものには反映されない何かが、同人作家の中にあるんじゃないか。それがメインとは逸脱したもの、少しずれたもの、メインではできないものなのかなって。

竹中：商業的ではできないような？

一路：うん。私は「当事者性」っていう言葉はあまり好きではないけど、簡単に言うと、メインカルチャーの作家が現代に生きる人をイメージして書く「働く」ということと実際に労働している人が書く「働く」ということが違うとか。そういうところにインディーズの力があるのかなって。

竹中：なるほどね。

一路：確かに、プロの人の方が文章はうまいし、キャッチーっていうか。

竹中：型っていうものがあるしね。

一路：そう。パターン化された展開とかね。そうじゃなくて、本当に今を生きている人が感じていることを拾い出したとか、メインじゃないところを追っていくサブカル特性を持った人が、既存の文学にないものをインディーズで探すのかもしれない。今の社会はどうなってるんだろうって心のどこかで思ってる人が、インディーズの世界にそれが落ちてくるかもって。まあ、そこまで考えて動いてないと思うけど、そういう心の動きがあるのかもしれないと思ったよ。

これからのこと

竹中：ポエイチと文学フリマの違いで、ポエイチは数十人規模とかでやっているからひとつひとつのサークルの個性が分かるんだよね。だから、すごく一個一個の意味が感じられる。これが文学フリマみたいに規模が大きすぎると、ひとつひとつのサークルの実態まで把握できず、同じようなことをしている人が沢山いるんだな…というところで終わってしまう。それが、何のためかやっているんだらうって感じに繋がるのかなって。

一路：そうだね。

竹中：でも、ポエイチの規模から文学フリマの規模に、そしてそれからプロの規模に、ってそういう世界を目指して一応やっているわけだから。この小さい規模だからやっていたいんですね、って言いたいわけじゃない。知っている人だけの中でやりたいってわけじゃない。

一路：うん。そうだね。

竹中：やっぱりそういう嗜好性がある人だけじゃなくて、一般の人にも興味を持ってもらえる作品をつくりたい。これからは、そういう仕組み作りができるといいなと思います。

一路：何かを発信しても、感想って得にくいよね。書き手と読み手の情熱の差があるから。書き手の情熱はすごいから、読み手はあえてメールしてまで感想を言えないというか。誰かに引っかけたり持ってもらうものじゃないといけないのかも。だめっていうにしてもさ。愛情がないと人を怒らないうって同じで、通りすがりの人が立ち止まってあえて感想を言うほど、何か引っかけだめさとか、良さじゃないと。竹中：一号出すことに参加したいとか、店に置いてもいいとか、取材が来たりとか、何らかのレスポンスはあったけどね。それがゼロだったらやれなかったよ。でも、純粋に作品の感想を言ってくれる人はほとんどいなかったね。

一路：だから、結局普通のサークルは自分たちで批評し合うんだよね。それがサークルへの愛なわけだ。

竹中：星屑書房については、基本的にはこのままのんびり活動していければ良いって思っているけど、サークルに課題があるとしたら、多少レスポンスが来るような雑誌にしていくってことかな。参加者にとってもうれしいことだし。

一路：星屑書房に参加すると、必ず感想がきますみたいなの。

竹中：できればそれが、サークル内の人が批評するとかじゃなくてね。今時、紙を配ってリアクションがくるぐらいの、それぐらいの紙にしたい。記者さんがなぜやっているの、って言うのもそういうことですよ。レスポンスが無い中でなぜやっているの、と。

一路：互いに批評もし合わない、外部からの感想もない。そんな中でなぜやっているのってことだね。続けられるのはなぜかと。表現にレスポンスは付き物だもんね。レスポンスいらなんだったら、日記でいいですよって。

竹中：そこにだらしなさを感ずるわけですよ。本当に日記なら自己完結しているけど、そんな自分を見てもらいたいの？ でも都合の悪いことは聞きたくないの？ みたいな。

一路：普通の人に、普通の感想を言ってほしいけど、言ってくれる人がいないじゃん。それだけの愛がないから。

竹中：そういうレスポンスをもらえるような雑誌を作ることが今後の課題ということ

で、意外にも前向きな話になったね。

あとは、私だったら歌会とか自分の批評を受けられる場に積極的に出たり、色々他人の作品をもっと読んで、他人の作品との関係の中で自分の立ち位置を整理したり。まさにあの記者さんも言っていたことだけど、そういう研鑽も必要だと感じています。

創星を作ってきたことの意義

竹中：話は戻るけど、私達の当初の目的は「あきなだより」だったわけで、なんちゃら文芸誌を目指して始めたわけじゃないから。昼休みが終わる前にゴミ箱に捨てる前にちらっと読むものっていうイメージだからね。一人の人に百の興味を持ってもらいたいわけじゃなくて、百人の人に一の興味を持ってもらいたいっていう気持ちで始めたからね。

一路：だから、結構大衆的なものを目指しているんだよね。

竹中：捨てられても全然構いませんよって。いうスタンスでね。

やってみてから分かったことだけど、誰かに会ったときに「こういうのをやってい

ますよ」って創星を渡すと、名刺代わりというか社交ツールになったりもする。それで違うグループとの付き合いが発生したり。自分が単なる受け手であるより、自分も何らかの活動をしている方が、他のグループの人とも交流を結びやすいのかなというのは実感したよ。

趣味の世界での社交ツールだけでなく、逆に会社の中とかでも、創星を配っても受け入れてくれそうな人を探したりして、素の自分を見せられる相手を開拓したり、自分のキャラ付けをするために創星が役立つこともあったし。自分の中のふたつの世界を近づけるためにも創星は役立ったって思っています。

一路：この活動をしているからこそ出会った人たちって多いよね。

竹中：かなり出会ったね。一号を作る時点では想定していなかったけど、何の意味があるのか分からないけど、六年間とか続けて十号までできたらさ。

一路：十号って考えたらすごいね（笑）

竹中：やっぱりその中でいろいろ知り合いも増えたし、ラジオにも出たし、新聞にも紹介してもらったし。何もないところから

始めて、新聞で紹介してもらってすごいよね。あきなびっくりでしょ。

一路：あきななんてもう保険の営業やってないよね。今頃結婚して主婦になっているかも。

竹中：なっているでしょ。二児の母だよ。

一路：二児の母って（笑）

（了）

★創星10号記念企画★

メンバー紹介

名前

一路 真実 (いちろまみ)

イラスト



年齢

31

性別

女

星屑書房に参加したきっかけ

書いた小説を誰かに読んでもらいたかったから。
福岡で文化系な人と出会いたかったから。(詳しくは、サブカル対談参照。)

普段している活動・好きなこと

ハンドメイドにはまっています。
アクセサリー、羊毛フェルト、アクリルフェルトのエコたわし作りがメイン。

これからのこと

世界に対して鈍感にならずに、小説を書き続けていたい。
あと、ベットの文鳥(ろまん♂)を手乗りで育てて、プライベートを充実させたい。

★創星10号記念企画★

メンバー紹介

名前 竹中 優子

※前の号まで鳩山豆子というPNでした。

年齢

31

性別

女



星屑書房に参加したきっかけ

職場の同期として一路さんと出会い、お互い文化系の活動ができる場所がほしいということで話が盛り上がり星屑書房を作った。今思えばそんな人が会社の同期にいたことが驚きです。

普段している活動・好きなこと

短歌を作っています。

学生時代は小説を書いたり雑誌を作ったり映画を撮ったりしていました。

我が家にいる文鳥をこよなく愛しています。

これからのこと

積極的に短歌を作って、賞に出したり、歌会に参加したり発表の場を増やせるようにがんばりたい。

日常生活を大切にしながらよい短歌を作っていきたいです。

★創星10号記念企画★

メンバー紹介

名前

詠人 不知 (よみびとしらず)

イラスト



年齢

85歳

性別

男

星屑書房に参加したきっかけ

知人のお孫さんから話を聞いて。

普段している活動・好きなこと

ゲートボール・菊づくり

これからのこと

ファンキーモンキージジー

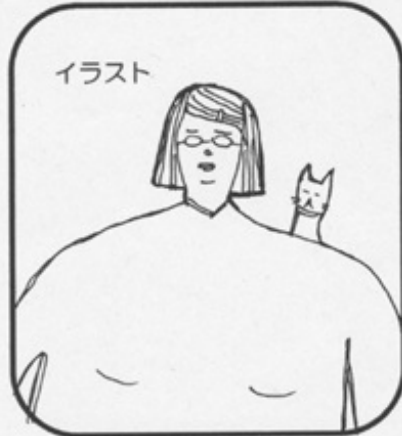
★創刊10号記念企画★

メンバー紹介

名前

マチコ・ラスメニーナス

イラスト



年齢

りんご32歳

性別

女

星屑書房に参加したきっかけ

夢枕に立った祖母からのアドバイスで。
今は七き

普段している活動・好きなこと

野球が女子までよくテレビで見たり
球場に応援に行ったり、バドミントンをします。

これからのこと

猫の可憐さを、色々な形で
ブログに伝えていきたいです。

★創星10号記念企画★

メンバー紹介

名前
To's job



年齢
64歳

性別
男性

星屑書房に参加したきっかけ
・ブックオカで偶然に出会った。

普段している活動・好きなこと
・彫刻や絵画の制作。最近は構想を練るだけで小休止状態。
・映画（DVD）鑑賞。モバゲーの囲碁で遊ぶこと。

これからのこと
・柘榴の絵を描いてみたい。

★創星10号記念企画★

メンバー紹介

名前

天沼 太郎 (あまぬま たろう)

ペンネームの由来は以前天沼に住んでいたところから。

イラスト



歴史

人歴：43歳。ほとんどが黒歴史
読書歴：40年
クラシック音楽歴：22年
中2で聞いた「運命」で開眼。
道を誤ったともいう。

性別

男

星屑書房に参加したきっかけ

友人から声をかけられて。二つ返事で引き受けながら、締め切り前の徹夜は今やお約束。

普段している活動・好きなこと

コーヒー道楽(先日コピ・ルアックを購入。これはおいしい！)
読書(知識欲+物欲>読書量→部屋に本の山)
クラシック音楽(最近演奏会に行っていないのでネタがなくなってきた)
雑談(いくらでも時間つぶせます)
妄想(・・・)

これからのこと

夢も希望もないサラリーマンですが、書きためた文章が出版されることを妄想中。

来年の目標

誤字脱字をなくそう！

★創星10号記念企画★

メンバー紹介

名前

馬場貴生

イラスト



年齢

35 さいだよ

性別

おとこのこだよ

星屑書房に参加したきっかけ
別の探し物をしてたんだけど、たまたま見つけちゃって。
それで友達が勝手に応募しちゃって……。
友達いないんだけど！

普段している活動・好きなこと
普段は畳の目を数えたり、ガンダムのことを考えたり、爽やかに変なことを考えたり
しているよ。

これからのこと
これからは妄想の世界に生きて、ひとりで幸せになりたいなあ。

★創星10号記念企画★

メンバー紹介

名前

い 衣
そら 空

イラスト



年齢

不 詳

性別

不 明

星屑書房に参加したきっかけ

2013年の福岡ポエイチに参加した際にお見掛けして、
その場で参加希望の意志を伝えました。

普段している活動・好きなこと

1 音楽を聴く、2 ライブに行く、3 映画を観る、4 ネットでサッカー観戦、
5 夏目漱石、寺田寅彦の作品を読む、6 高知県まで一人旅
以上が人生の97%を占めている。

これからのこと

プロの作家になって印税生活、毎年夏に世界各国の夏フェスに参戦、欧州各国でサッカーを観るといふ壮大な夢は、今でも叶えたいと思っていないこともない。しかし夏目漱石と寺田寅彦を好きになって以来、自分が小説を書く意味を見失ってもある。

★創星10号記念企画★

メンバー紹介

名前 坪井希（つぼい のぞむ）

イラスト

年齢 23

性別 女

星屑書房に参加したきっかけ

社会人になって、小説を書くことから完全に逃げてしまわないように文芸サークルを探していました。素敵な出会いに感謝しています。

普段している活動・好きなこと

普段⇒家事、仕事、ジム、散策

好きなこと⇒カラオケ、酒、料理、散策

これからのこと

自分の書きたいものを少しずつでもまとめていく。最終的に形にできればと思います。どうしてもなく不器用ですが、別の創作もやってみたいです。

★創星10号記念企画★

メンバー紹介

名前

松田 定幸



年齢 来年(2015
年)で丁度五十歳

性別

♂

星屑書房に参加したきっかけ

FM 福岡のラジオ番組「SUPER RADIO MONSTER ラジ★ゴン」木曜日のコーナー「ラジゴンいきたくなる部」で当サークルが紹介されて関心を持ち、web ページを閲覧してその理念や運営ルールに共感したから。

普段している活動・好きな事

主に、自作イラストの制作・発表を手掛けています。

喫茶(自宅で紅茶を淹れる)、飲酒、ネットサーフィン、読書、フリーペーパーの収集と熟読、美術館巡りなどを愛好しております。

これからのこと

本業の仕事をちゃんと両立して、尚且つ心身の健康とコンディションに気を付けた上で、当サークルへの参加(原稿執筆やイベントへの参戦)と並行しながら、ソロ活動(個展の開催など)にも取り組んでいきたい所存です。

★創星10号記念企画★

メンバー紹介

★名前

間々 えいよ

イラスト



★年齢

181,432 歳

★性別

女性

★星屑書房に参加したきっかけ

ラジオで仲間を募集されているのを知りました。
その後、星屑書房のHPを見てメールしたのがきっかけです。

★普段している活動・好きなこと

- ・ウーロン茶を飲む。
- ・猫を愛でる。
- ・ラジオ体操。

★これからのこと

- ・3年以内に本を出版したい。いや出版する！

『これは私の日記であり、曖昧模糊たる回想記であり、修辞の限りを尽くすならば限られた世界の史記である。この猥雑な文字列が、

いつかどこかで、誰かに見とがめられることを望む』

○昨日夕刻、とうとう『大判白紙辞典』の七冊目が埋まった。右記の前文を書き入れたのもこれで八度目となる。不毛な日々のお暇つぶしをいくら積み重ねたところで何もかも一向に上達しない。ただし重量だけはそれなりになった。パンの底が抜けてしまっただけは困る。いつかどこかで、書庫の類を造らなければならぬだろう。

今日は保存していた食材をほとんど使い切った。マダライモ、干し肉、燻製魚、酸味の強すぎるオレンジボールもだ。どれもこれも容器から皿に移しただけだが、それでも何十日かぶりの豪華な食卓だった。日記が八冊目まで続いたお祝い、ではない。『世界橋』の端から端、太平洋を渡り切った。

私はようやくこの島国に帰ってきたのだ。

○起床して真っ先に塩作りを始め、仕込みを終えてからは波止で

のんびりと釣り糸を垂らす。十分すぎる量が釣れた。疑似餌しかなくともなんとかなるものだ。

今日食べる分だけを残し、他は調味液に漬ける。焼き始めてから食べるまでずっと空を警戒していたが、オオカモメは私が持ち上げられるサイズの魚には見向きもしなかった。魚を車の上で干しつばなしにしても、おそらく盗られはしないだろう。

○ここ数日晴天が続いている。干物の出来栄も、パンの調子もすこぶる良い。一日通して走ってもソーラータンクが目減りしないのは、本当にありがたかった。

このベースで走り続ければ近いうちに我が故郷に着く。都合三度目の帰郷だ。それは覚えている。しかし、最初に記録を付け始めてからどれほど月日が経っただろうか。

……残念ながら、瞬時に計算するすべはない。日付を書き込む習慣はやめるべきではなかった。

○走りづらさで言えば、熱帯砂漠もコンクリートロードもはや大差ない。無数に入った亀裂からはもれなく育ち過ぎた植物が伸びている。理論学派の言葉を借りれば『生態系異常』、自然学派の解釈ならば、このあたりの地場に流れる生命エネルギーとやらが狂い切った結果ということなのだろう。早々に、自動操縦への切り替えは諦めた。

垂直に生えている丸太のような茎なら避けられるが、地を這う蔓

は取り除かなければならなかった。何度も鉈を持ってパンを降りるのは面倒である。しかし、万一車体に絡まったら、トゲのような産毛でタイヤに穴が空いたら。愚痴るだけでは済まない。

○この道路から左右どちらか、数メートルも逸ればだたっ広い荒野だ。橋を降りてからの数日間と同じように、間違いなく楽に先へ進める。ここが別の大地ならばとつくにそうしていた。

つまらん意地だ、非合理的だと、リュウならきつとそう言うだろう。だけれどこの国に残る道ならば、できる限り踏み越えていきたくかった。

柔らかい葉(ただし私の体が隠れる大きさだ)が窓を撫でるたび、縄のような蔓草をたたき切るたび、懐かしい草の香りがする。

○ぐずぐずの豆腐のような建物が周囲にちらほらと現れ、そのうち道路は四方に分かれて広がっていった。どの道も歪な建物群へと繋がっている。マップを確認するまでもない。自然学派の居住区だ。

窓や扉だった隙間からはやはり蔓や茎が伸びていて、網のように白い立方体を包んでいた。時折、網目から飛び出た部分が地面に沈み込むように、あるいは強風に削られるように形をなくしていく。車は止めず、運転席から何度か声をかける。お決まりの呪文だ。

『自然学派の輩よ、私が見えるか!』

『私は選ばれし民ではないが、貴君に害なす理論屋共とは世界を別

つ者である!』

『自然節理に従って、この地を踏むことを許してほしい!』
返答はない。分かっていたことだが。

○白い迷路を走り回り、目当てのものを見つけた私は歓声をあげた。有機電池で覆われた四枚の羽を持つ風車。地中にある巨大備品庫の電源だ。

設備チェックを手早く済ませ、オートキーを使って風車小屋の中に入り込んだ。そのまま地下へ降りていく。

シェルターを兼ねたこの場所だけは、年月に伴う劣化がみられない。ひんやりしていて薄暗く、冷却装置の呻きだけがぶらぶらと永遠に続いていく。

まずは常備薬や不足物の補充(『大判白紙事典』も忘れていない)。次は衣類などを総入れ替えし、不要なものを全て捨ててパンに空きをつくる。その後で、醬油、酒、みりん、味噌、油、コメ袋と水を載せられるだけ載せた。鯉節や梅干しまであつたのは大収穫だ。

ああ夢にまで見た祖国の味!

○大荷物を抱えての往復は足腰にかなりのダメージを与えた。パンを停め、2階テラスで一日を過ごす。ひたすら米と肴を食べ、純米酒を舐め、歌っていたら日が暮れた。町の灯はとうに絶えたが、気にすることはない。世界中の備品庫と太陽がある限り、当面我が暮らしは明るいのだ。

『あなたちよっと飲みすぎだわ。顔が真っ赤じゃない』
深酒を窘める声が耳の奥で響いた。小麦色の髪をかき上げ、サラが私を見下ろしている。

『まだいけるだろう。これくらい』

『ラウ、冗談でしょ、この合理主義者！』

『あいにく酒がある時だけは宗旨替えするんだ』

彼女が翡翠色の目を吊り上げて、リュウはお構いなしだった。

上機嫌で私のグラスに白酒を注ぐ。私はそれをちびちびと飲む。

『リュウの眉間から皺が消えるのは、サラが怒ったときだけだね』

『馬鹿なこと言っていないですよ。ほら、せめて何か食べて』——。

グラスの碎ける音で我に返った。ここは学生寮ではない。

……酔いを醒ますためにペンを執ったが、これでは逆効果だ。

過ぎ去った日々が空の大河に浮かんで呑まれていく。重く、激しく、冷たい波が私の胸に押し寄せ、引いたと思えば更に勢いを増して襲ってくる。後悔してももう遅い。

○オバケ植物の数は減ったが、相変わらずひどい道だ。車が揺れるたびに吐き気がこみ上げる。地獄は夕刻まで続いた。

白い街からただの平地へ、窓に映る景色が変わっていく。ようやく居住区の境まで来た。ハンドルを放棄しベッドに倒れこむ。今日は水しか口にできなかつた。

○『自然』と『理論』。二つの学派の争いなど私にとってはどうでもよいことだった。性別すら二択でないのが常識とされたあの時代に、皆どうしてあそこまでむきになったのだろう。

私が中庸を主張するたび、二人の友とは距離ができた。

『思考を止めるな、現実を見る。どうしてあいつらを前にしてそんなに呑気でいられるんだ』

リュウは唾を飛ばして憤り、同時に理論学派の拠点である『英知の塔』へと私を引きずっていかうとした。

『（選ばれし民）って呼び方、全然悪くないと思うのよ。（新人類）よりはずっと温かみがあるし、結束が強まるっていうか——』

あの熱病から生還したはずのサラは、いまだ高熱に浮かされたように獲得した力にのめり込んだ。

二人の溝は深まり、私は最後まで何もできなかった。

サラは退院・復学から半年もしないうちにアカデミーを去った。自然学派の前身に加わったことを伝えても、リュウは何も言わなかつた。病にかからなかつた彼は随分前から、生き残った彼女を異物のように扱っていた。

二人とも、お互いが恋人であったことなどすっかり忘れてしまったようだった。

○はやる気持ちがないではないが、この暴風雨の中を突き進むことが賢明であるとは言いがたい。たったの数メートル先が雨で煙ってほとんど見えなかつた。窓を全て閉め、ソーラーパネルも裏返して、

このまま嵐をやり過す。明日か明後日には出発できるだろう。

エネルギーを節約するため、調理はいつも以上に手早く済ませた。作り置きした魚に野菜の味噌汁、そして梅干し。どんな時であつても白米は美味い。食後はベッドの上で地図を眺める。故郷まではあと百キロもないと分かった。

酒に浸り幻覚を見てから、過ぎ去つたことがどうにも頭から離れない。

○時間と共に記憶は遠く曖昧なものになり、また物証も失われていく。文字に起こす端から変質しているのは間違いない。私があつた病について、世界中で起きた現象について、正しく理解できる日は永遠に來ないだろう。

X型ウイルス性黄疸出血熱。南アフリカで突然出現したこの人獣共通感染症は瞬く間に世界に広まり、この星の生命を削り取つた。

恐慌の一年が過ぎ、(やはり突然に)病が消失した後で、生き残つた患者たちには新たな特性が備わつていと分かった。

生命エネルギーへの干渉能力、というところだろうか。一人では種の発芽を早める程度のものだが、数を集めた時のそれは『魔術』と呼んでも差し支えない。

チューリップの球根一つが孟宗竹のように育ち、虹色の花をつける。ケロイド状の火傷跡が日焼け程度に薄くなる。……そういうことを、前提知識も試行錯誤もなく容易に起こしてしまうのだつた。

しかも彼らは、その力の源泉について決して自ら探ろうとせず、

また検証されることも強く拒んだ。『自然に寄り添い、ありのままに力を使った結果』だと、その一点張りだつた。科学者や医療関係者の多くがこぞつて元患者排斥に回つたというのも分からはない。

『思考停止は重罪。探究の上に生活がある』

『築き続けた英知を誇ろう』

『仕組みの分からぬものに頼るな!』

整然と並ぶ看板を一つずつ目で追つていく。パンは氷上を滑るようになつて進む。道の先にはブロンズ像の群生。高層ビルの森。その奥に高く高くそびえる硝子細工のような『英知の塔』。

ようやく故郷が見えてきた。

○人の住まぬ家は驚くほどの早さで荒れていくという。では誰もいなくなつた学術都市はどうか。……風雨にさらされた分だけ傷や汚れはついてはいるが、いまだ崩壊の兆しはない。あの白い街とはまるで違つていた。

科学技術の粋を尽くした結果を、ゆつくりと歩きながら眺めた。建物の中に入ることはしない。吹き抜ける風に耳を澄ませ、街の匂いを確かめながら中心部へと進んでいく。かつて多くの車と人が行き来していた大通りに、私の靴跡だけが響く。

石畳の広場を抜け、国立公園跡を突つ切つた。目の前に立つ『英知の塔』に用はない。そのままぐるりと裏手に回る。

我らが出会つた学び舎も、煉瓦色の学生寮も、まだしっかりと残つていた。すっかり錆びた正門を過ぎ、たまたま私は走り出した。

階段を上り、廊下を抜け、教室の戸を一枚一枚開け放つ。ガラス窓に反射した陽がきらきらと両の目を刺した。あつという間に息が切れる。大粒の涙は零れるがまだ。広大な敷地の隅から隅まで、ひたすらに自分以外の人影を捜し求めた。

開きつばなしの口からは喘ぎばかりが漏れている。大声で名を呼びたい『彼ら』がここには大勢いたはずなのに、顔まで確かに浮かぶ名前は随分前から二つしかない。

『憩いの中庭』もまた、十数年前から何も変わらない。大きき形の不揃いな石が枯れた芝生を埋め尽くし、橙の陽を浴びている。一つ一つを検めなくても彼らの墓はすぐ見つかった。できるだけ形の良い石を選び、最も日の当たる場所に二つくつつけて置いたのだ。

劉秀峰。サラ・ウィリアムズ。苦勞して刻み込んだ名前はまだまだつきりと残っている。

なんととはなしに、『ただいま』と言った。

私は今回もまた、ひとりぼっちで戻って来てきてしまった。

○一度目の感染爆発パンデミックをきっかけとして、誰もかれもがそれまでの関係性を放り捨てた。人種、宗教、歴史、文化——ごちゃごちゃに原因が絡み合っていた争いは徐々に絶えていき、その代わりに世界の二極化が始まった。未だ『魔術』『呪術』の概念が根強くあった発展途上国も、各地でひっそりと暮らす少数民族ですらも、最終的にはどちらかの学派に取り込まれていく。カラフルな地図は町から消え

て、新しく緑か白かで塗り分けられたものが売れた。

二度目の感染爆発は、世界の再編が佳境を迎えたころに起きた。

理論学派は資金と人とを大量につき込み、オールジャンルの実験と治療薬の大量配布を繰り返した。自然学派は『力』を持つ者たちが病に伏した者に手をかざし、彼らなりの治療を行った（ウイルスを無害に変えるとか、患者の回復力を高めるとか、そういう趣旨の試みだったようだ）。

人々が躍起になればなるほど、ウイルスは性質の悪い物へと変質していく。いつの間にかヒトの命しか奪わなくなる。感染率、死亡率ともに9割を超えた。もはや誰も手がつけられない。廃れた土着信仰に戻る動きも出たが、もちろんただの加持祈祷ではどうにもならない。そのまま、人類は滅んでいった。

私も皆と同じように『Z型』と名を変えた病魔に倒れた。担当医師と看護師が三日と経たずにいなくなった。病室から出られなくても、人がばたばた死んでいくのは本当によく分かった。立派な総合医療機関も廃病院の霊安室も、もはや大した違いはない。

悟った分だけ気は楽になった。発症から十日が過ぎたころ、私は死を確信したまま意識を手放した。

……具体的な日数は定かでない。おそらくひと月と過ぎてはいなかったろう。私に訪れたのは平穏な目覚めだった。黄疸だらけだった肌は元に戻り、熱も痛みも消えてなくなり、出血も止まっていた。ベッドを降りると、二人の友が折り重なって死んでいた。

○『新たに発現した力も、これまで積み上げた英知も、こたわることなくごたまぜにして日々を富ませればいいじゃないか』

そう口にしただけで私を激しく責めた彼らは、一体何を思つてあそこに立っていたのだろうか。各種メディアと同じように、『どちらか選ばぬことは罪だ』とこちらを詰つた友だった。完全に選択を放棄した私を、本当に、心の底から純粹に、救おうとしてくれたのだろうか？

実験台にされたのではと、未だに疑うこともある。だが結果として病は癒えた。さらに言うならこの数十年、まったく年をとつていない。少しの傷なら瞬く間に治る。二カ月の間絶食しても肉体的には平気だった。

私一人が（新人類）となり、この星でただ生きている。

否！ 否！ 否！

きつとこの星のどこかには、同じ境遇の人間がいる。だからこそ私は今回もまた友の墓石に別れを告げて、ここから旅を始めるのだ。

七ある巨大な『橋』を行き来し、世界全土を駆け巡り、何度でも仲間捜しを繰り返そう。車がなくなれば歩いて。橋が崩れれば泳いで。もしも気力が尽きたとしても、今度はその地で生きていけばいい。自死なんて面倒は選ばず、ただ命尽きるまで。

今日のところはペンを置き、布団の中でぐっすり眠ろう。日の出

と共に出発だ！

——いい加減に目が疲れてきた。薄暗い書庫で読む金釘文字ほど視力を落とすものはない。今日のところは、ここまででやめておくとしよう。

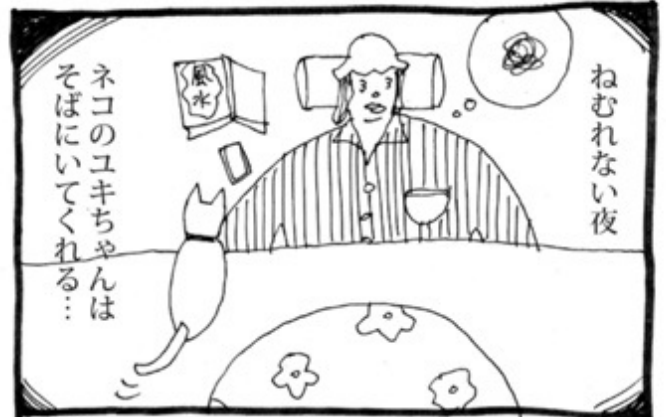
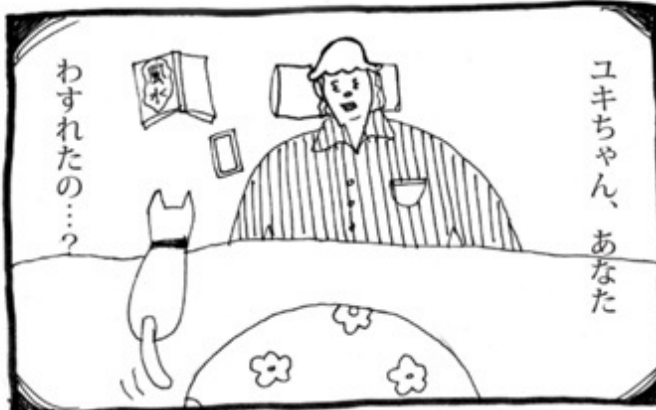
分厚い本を小脇に抱え、本棚にかかった脚立を上る。元通りの場所に押し込んでから、びっしり並ぶ背表紙を眺めて明日読むものを見繕う。

——口に出して読むにしても、このあたりの巻は駄目だな。声色を変える部分が少なすぎる。やはり一、二巻あたりの方が台詞も多く、演じてみるには面白いのかもしれない。

小机に『大判白紙辞典』を積み上げ、私は書庫を後にした。

猫しかないけど

マチコ・ラスメニーナス



クラシック音楽教養のお時間

第8回 ギエムの至福、ポゴレリッチの恐怖

最初はただ暗い曲だった。その暗さがいつの間にか恐怖に変わる。恐怖はやがて絶望となり、絶望のまま地獄巡りが始まる。時として差す光はあまりにか細く、蜘蛛の糸のように弱々しい。それにすぎる私は登りも下りも出来ない。一瞬の話である。

今回取り上げる作品

- ・シルヴィ・ギエム バレエ「三つの愛の物語」

2003年6月5日(木) 18:30～ 福岡サンパレス

- ・フランツ・リスト ピアノ・ソナタ ロ短調

演奏：イーヴォ・ポゴレリッチ CDとライブ

ライブ：2012年5月9日(水) 19:00～ サントリーホール

もう十数年前の話である。シルヴィ・ギエム*1という素晴らしい踊り手がいると知った。何となく気になっていた矢先*2、ギエム自身がプロデュースする「三つの愛の物語」公演があることを聞いた。これはきっと縁があるのだろうと思い、福岡サンパレス*3に出かけてみた。まだインターネットの未整備な時代、ギエムがどんな顔をしているのかも知らずに(それこそ男性か女性も知らずに)出掛けたその公演が凄かった。

最初のプログラムはチャーホフ*4「三人姉妹」。踊る三姉妹の一人だけ、(あえてそう踊ったのだろうけど)動きの優雅な女性がいた。きっと彼女が噂のギエムだろうと見ていたら、その通りだった。

「三人姉妹」は読んだことがなく、チャーホフも名前しか知らない。しかし、解説を手がかりに舞台を見れば、話は理解できた。そして、ギエム演じる主人公の至福と最後の悲劇は、それが可憐な乙女(何度も繰り返すが、そういう演出なのだろう。以下同じ)だけに強烈だった。

二つ目の演目が日本人の踊る「カルメン」。最後がまたギエム主演の「マルグリットとアルマン」*5。これが特に素晴らしい舞台だった。あらすじは以下の通り。

地方貴族の純朴な息子アルマンが、高級娼婦*6 マルグリットに恋をする。二人はやがて一緒に暮らし始めるが、アルマンの父の懇願により別れることとなる。それから数年後、身を持ち崩し、病(結核?)で死の床にいるマルグリットのもとに、誤解の解けたアルマンが現れる。愛するアルマンの腕の中、恍惚のうちにマルグリットは死んでいく。

ギエムのバレエは、分かりやすい鮮やかさに加え、その動きの中に表情があった。こちらがバレエ初体験の素人なので勝手な思いこみかもしれないけど、単純な移動は当然ながら、飛ぶ、跳ねる、廻るの動きに切り替えのわざとらしさがない。すべての動きが自然で、ハラハラすることなくドラマに集中できる。幸せな二人はこの上なく幸福で、不幸なマル

グリットには涙が出そうになった。昔、「こんなにわかっていいかしら」という参考書シリーズがあったけど、それを地でいくような舞台である。

この舞台にさらに陰影をつけていたのが伴奏。伴奏はピアノだけで、フランツ・リスト*7のピアノ・ソナタが使われている。30分も続く長い曲(ここでは冒頭を繰り返していて、もう少し長くなっていた)がどうしたわけかこのストーリーにびったり。動きだけでは伝えきれないことを伝える、あるいは念を押す効果がある。例えば、二人が幸せな新婚生活を送るところ、音楽がふっと途切れるところがある。二人の生活は、やがて終わることが暗示される(主人公二人も予感してるのかもしれない)。

結果、今まで難解と思っていたこの曲がするすると頭に入ってくる。この曲はこんなに具体的な(ストーリーのはっきりした)曲だったのかと己の耳の悪さを思い知った。

舞台は悲劇だったけど、素晴らしい体験だった。同じ体験をしてみたいと思い、家に戻るとすぐ持っていたリストのCDを聴いてみた。聴いたのはイーヴォ・ポゴレリッチ*9の録音。ところが何だか様子が違う。CDで聴く(ポゴレリッチの)リストは禍々しい。すぐ前に素晴らしい舞台を観たせいだろうか、こちらの感受性も上がっている。それはマルグリットとアルマンの恋愛譚ではない。冒頭の暗い和音があつという間に黒く広がる。見てはならない恐ろしいものに気づいてしまった感じ。何なのだこれは？

ごくごく希にしかないけれど、演奏に触れたとき、頭を通り過ぎて直接感情が刺激されることがある。これをもしかしたらトランス状態というのだろうか？ともかく、そうになってしまうともういけない。鳴っている全ての音が意味ありげに響き、心がかき乱される。思考を言語でトレースすることは難しい。しかし、言語化できない感情(情念)を語ることはもっと困難である。ところが音楽(芸術)は、複雑に絡み合う情念を、聴く者の心の中に再現できる。おかげで、何の体験も経ずに、私はいきなり恐怖を感じてすくみ上がった。

考えてみれば、こちらはバレエの素人。いくら天才的な演者とはいえ、その舞台を半分も理解できなかったに違いない。伴奏の方も、先ほどのバレエでは従。メインはあくまで役者の方である*11。それに対しこのCDは主。聴き慣れた語法の音楽なので自ずとピアノが語り出す。その語りが恐ろしいものだ。何だか暗い雰囲気だなどと思っているうちにすんとこの世ならざる世界に突き落とされる*12。これは私の内面なのか？いや、作曲家か演奏家の表現しようとしていることだ。心の奥底に惹起されたうごめく情念が、まるで自分の心みたいにしっかりと感じられる。映画や読書の登場人物に完全に一体化してしまい、心の中が同化した時みたい。しかもその同化は私を言葉にできない暗黒世界に誘っているのだ。

これまで長くて退屈としか思わなかった曲が、中に熱くて恐ろしい(?)パッションを持ち、しっかりしたドラマを持つ曲だと分かった。ギエムの舞台がこの曲と私の橋渡ししてくれたのだ。

その後の話

2012年、ポゴレリッチの弾くリストのピアノ・ソナタを生で聴くことができた。速いところはやたら速く、遅いところはゆっくり弾かれ、またきれいなところは、ちょっとあ

り得ないぐらい美しい演奏だった。何だかわざとらしいなと思ったのは最初の数分。ジェットコースターさながら、訳も分からず引き回され、気がつくとも音楽は終わっていた。平凡な日常の、奇妙で強烈な体験である。

* 1 : シルヴィ・ギエム : (1965年2月25日-) フランス、パリ生まれのバレエダンサー。「100年に一度の天才」がキャッチフレーズ。天才と呼ばれる人間は多数いるが、100年云々の言葉を出すまでもない傑出した天才。残念なことに2015年12月の東京公演を持って引退する。舞台をDVD化したものが多数出ているが、ドキュメンタリーの「エヴァダンシア」もお勧め。

* 2 : 同じ時期に、全く関係のない人から同じことを聞かされたり、あげく体験したりするってこと、経験ありませんか？

* 3 : 福岡市民は誰もが知っている多目的ホール。コンサートから大学入学式、結婚式まで出来る。ただし音響は今ひとつ。呉服町から歩くと結構遠いので、和服の方は要注意。

* 4 : アントン・パーヴロヴィチ・チェーホフ(1860-1904) ロシア出身の劇作家、小説家。手っ取り早くチェーホフを知りたいければ、阿刀田高の「チェーホフを知っていますか？」がお勧め。

* 5 : 同じ原作から作られたオペラ「椿姫」(ヴェルディ作曲)もある。もちろんリストのピアノ・ソナタは使われない。

* 6 : 娼婦といっても風俗産業を連想してはならない。社交界の花形。今なら「会いに行けるアイドル」？

* 7 : フランツ・リスト(1811-1886)。ハンガリー生まれの作曲家、ピアニスト。超絶技巧(馬鹿テク)を売りに、世界で初めて、いわゆる「ピアノ・リサイタル」を行った。演奏会の前に「リスト来る！」の看板を並べ注意を引き、本番ではステージに出るとすぐ手袋を投げ捨てる(女性がそれに飛びつく)演出は効果満点。演出家の才能も持ち合わせていたのだろう。晩年は深みある作品や現代音楽の走りとなるような作品を作りつつ、宗教家として人生を終える。フジコ・ヘミングの弾くラ・カンパネラ、村上春樹「色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年」*8で使われるル・マル・デュ・ペイ(郷愁)など、現在でも話題を振りまいている。

* 8 : 村上春樹の小説にはクラシック音楽がよく出てくる。しかし、作品の内容に即したジャズが使われているのに対し、クラシックはあまり関係ない音楽が使われてる気がする。そういうところがノーベル賞を遠ざけている？

* 9 : イーヴォ・ポゴレリッチ(1958-) クロアチア出身のピアニスト。ショパン・コンクール*10の落選で一躍時の人となる。日本好きか？日本での公演は多い。2010年の激遅演奏が奇人ピアニストを強く印象づけたが、ただの奇人というわけではなく、真性のピアニストは奇人に見えるというだけのこと。聴きに行くと損なし。

* 10 : ピアノ三大コンクールの一つ。正式名称はフレデリック・ショパン国際ピアノ・コンクール。他の二つは、エリザベート王妃国際音楽コンクール、チャイコフスキー国際コンクール。ピアノの神童が腕比べをする。時々衝撃の事件が起きるが、衝撃だけで終わったピアニストが何名か。

* 11 : 伴奏曲が、主であるバレエを喰ってしまっただけとはいけませんが、それはそれで面白いかも。ニック・ノルティは自分が主演する映画の相棒役にエディ・マーフィーを起用したが、映画で印象に残る俳優はエディ・マーフィーの方だった(映画「48時間」)。

* 12 : 音楽(クラシック音楽)では感じがつかめないう方にはラヴクラフト作のクトゥルー神話シリーズがお勧め。日常に存在しているかもしれないもう一つの世界を体験できる。恐怖を妄想することは誰にも出来るが、その恐怖世界を、ラヴクラフトは日常の延長線上に構築して見せた。作者の死後もファンによって続編が次々と書かれている。



コ イ ア ソ ビ

恋遊

一路 眞実

(いちろ まみ)

1. 清遊

ミラーボールだけが一定の速度を保って回り続け、壁面に光の粒を描く。青暗く体を照らす灯りは、視界を狭めるために取りつけられたようで何だか不気味だ。窮屈なソファにじっと身を寄せ合い、誰も注目しない独唱が思考のバックグラウンドで流れる。

「静しずかちゃん、次の曲入れて」

向かい側に座っていた先輩が気を遣って渡してきたリモコンを受け取り、アーティスト一覧からキタユウカを探す。誰も聴いてないみたいだし、知らない曲でもいいでしょ。送信ボタンを押して、画面に出た曲のタイトルを確認すると、リモコンを隣の人に渡す。

「キタユウカ、好きなの？」

リモコンを受け取った彼が、私にかけた最初の言葉。キタユウカという単語が他の人の口から出てきただけで驚く。それが、つまり、彼との出会い。

「お願いだから、静ちゃんたちも来てよ。女性がいた方が盛り上がるからさ」

よく知らない社内のプロジェクトの打ち上げ。参加していた同じ係の先輩が、無理やり付き合わせた飲み会だった。行って見たら、他の課の人ばかり三十人ぐらいいいて、私は共通の話題もないまま誰とでも何となくできる話をした。二次会のカラオケ店の前に着く頃には、一緒に行った係の女の子はいつの間にかフェードアウトしている。そういうのがうまくできなくて、いつも先輩に巻き込まれるんだよな。自分を責めてみたがどうしようもなく、たばこの煙が立ち込める室内で、人の隙間に挟まっていた。

私が歌い出しても、室内には雑多な声が入り混じる。

「課長、次もビールでいいですか」

電話を首に挟んで、メニュー表を見ながら大声で聞く男性。

「愛なんてない。愛なんてない」

私の口から流れ出る歌詞。

「だからお前、プロジェクトの話はもう

やめろよ」

仕事の話をしようとして、酔っ払った上司に怒られる人。

「愛なんてない。それは幻想だよ」

私の口から少しだけ漏れ出ている歌詞。

「ちよっと、灰皿変えて」

室内に入って来た、バイトの若い子の肩に触れて要求するヘビースモーカー。

「愛なんてない。これはただの歌だよ」

曲が終わると、次のイントロが流れる。

ムード歌謡は年の離れた上司のもので、できる社員はさつと立ち上がり、拍手で曲を迎えて太鼓持ちに走る。任務を終えた私は、溶けた氷の水で薄まったオレンジジュースをストローで啜る。

「さっきの曲、俺の一番好きな歌だよ」

隣の彼が耳元で囁く。

「どうして好きなんですか？」

彼と目が合う。たぶん二秒間くらい。

「何だか、恋人に言い訳してるような歌だろ」

ふっと笑った彼の口元が少し歪む。

「愛なんてないって言いながら、最後は

これはただの歌だよって。わざわざ言い訳してる。そこに歌手としてじゃなくて、人間のキタユウカを感じると思わない？」

また少し笑って、焼酎のグラスを持ち上げた。歌詞の中から現実のキタユウカを拾い出し、その恋人との関係に彼は思いを馳せている。

相手のことを深く知りたいたいと思つていふことは、自分のことも深く知られたいと思つている証拠だ。彼は好きな人に誠実ではないだろうか。頭の片隅でそう思いながら、私はまた薄い黄色を口に入れる。酸味だけがずっと口の中に残っている。

その夜以来、社内の食堂や近くの駅で彼の姿を見かけるようになった。遠くに佇む彼と目が合う。目が、離せなくなる。

廊下ですれ違う度に、会話を交わす。明るいとこで見る彼は、あのカラオケの夜よりもずっと、サラリーマンだ。ひと回りくらい年齢が上で、普通だったら話しかけられない。よく知らないって、

恐ろしい。

「静ちゃん、これ持つてる？」

彼が廊下で渡してきた、キタユウカのインディーズ時代のプレミアACDを見て、私は人目をはばからず飛びあがった。

「まさと眞人さん、これ持つてるなんてすごい。

ずっと聴いてみたかったです」

彼の歪む唇が、いつの間にか好きになつていた。恥ずかしがっている彼の心が表れているから。

「もう帰った？ こっちは、まだ仕事中」

「今日は飲み会だった。今、電車から降りて歩いてる。ちよつと話せる？」

「休みだけど何してる？ 写真ほしいな」

「ママな彼は密な連絡を好む。」

「静ちゃん、全然連絡くれないね」

「返信遅いよ。愛が感じられない」

「今、男というんじゃないの？」

少しでも連絡しないとすぐに疑う。他に男がいるのではないかと責められる。

「もう連絡しない」

すぐにいじけて、私との関係を放棄しようとする。

でも、慌てて電話して話すと、その束縛は感じられない。

「今、どこ？」

彼の後ろからがやがやした音が入る。

「外。歩いてるところ」

彼は家では電話ができないと言う。理由は、妹と一緒に住んでいるから。

「怒ってる？」

「怒ってないよ」

メールだと必ず喧嘩なのに、話をすれば自然体の彼に戻る。

「昨日かわいいネックレスしてたよね」

「もらったんだけどね、昔」

「つい口がすべってしまった。」

「男からでしょ」

「……違う」

「絶対そうだ」

ぶつとと電話を切られた。何よ、と思

つたらすぐにメールが届く。「違う男があげたものを身に着けてるなんて許せない。壊して」

「壊す？」

「ばらばらにした写真を送ってくれるまで連絡しない」

「何でそんなことしないといけないの？ 物には罪がないでしょ」

「写真送ってくれないなら、もう連絡しない」

結局、根負けして高価でお気に入りのネックレスをペンチでばらばらに切り離す。テーブルの上で散らかるネックレスの残骸は、どうして私が犠牲になるのとささやかに責め立ててくる。分かっている。分かっているから、もうそんなふうに見つめないで。

「はい、これ。誕生日プレゼント」

穴埋めに買われたネックレスは、前のものよりもっと高価で私に似合っていた。

うれしいと言ったものの、何だかどこかしこりが残った。彼と会う日はいつも首

元に心もとなげに光っていたけれど、そうでなければアクセサリー入れに押し込まれたままだった。そのネックレスも無

言で念を送ってくる。どうしてあんな安

い

っぽいネットレスに未練を残すの。私の方がいいに決まってる。

彼が私を縛りつけることは、愛情表現の一種だと思っていた。文章でしか会話しなければ、すれ違いたくもなるもの。穏やかで優しい彼は、文字で喧嘩をふっかけ遊ぶを楽しんでいるだけだ。そうして愛情を確かめる、単なる戯れだ。

そうした関係が一年ほど続いたある日、彼と社内で話しているのを見かけた同僚が、ランチのときに何気なく言った。

「静って、佐伯さんと知り合いなんだ」

「うん、まあね」

いくら業務上の関係がないとしても、仕事の場では互いの領域に踏み入れないということとを暗黙の了解としていた。それが年上の彼との恋愛の礼儀だと思っていた。関係が社内に広まると、お互いに仕事が生かしくなるような気がする。

私は曖昧に答えて、話の先を催促した。「佐伯さんの奥さんって、カリスマ美容師らしいよ。この前、雑誌に載ったって」

——奥さん。

彼の属性を語るうえで、聞きなれない単語が出てきた。

「……佐伯さんって結婚してたの？」

結婚していたのに、あんなに嫉妬する人なの？ そう訊ねたかった。

彼にとつて、これは恋なのだろうか。

2. 遊軍

エレベーターの中で腕時計を確認する。夜十一時過ぎ。腹が減った。テーブルにサラララップのかかった皿が一食分。想像してみたものの、すぐに打ち消す。うちに女はいるが、主婦はいない。

玄関を開くと、部屋の中は真っ暗だ。

香澄は、まだ帰っていない。Tシャツとトランクス姿になり、キッチンに立つ。

鍋に水を入れて火をつける。自分で作れる料理なんてほとんどない。毎日パスタだ。茹でてレトルトのソースをかけるだけで済む。

ガチャ。玄関のカギが開く音がする。

スリッパを履いた香澄が部屋に入ってきて来る。ちらりと横目で俺の姿を確認した。

……はずだ。香澄は何も言わないまま、自分の部屋に入る。もちろん俺も何も言わない。短いホットパンツに着替えて出てくると、リビングのソファにかけてテレビをつけ、買ってきた缶ビールのプルタブをひねる。その様子を目の端で確認し、完成したパスタの皿を持ちあげて部屋に戻ろうとすると、香澄が言った。

「パンツでうろろしないで」

一瞬、テレビに向かって発した独り言かと勘違いした。いや、数週間ぶりに交わす会話だ。あいつ、あんな声してたんだっけ、忘れてたな。そう思っているうちに、リビングを出てしまった。あ、返事するのを忘れた。すると、閉じたドアの向こうから、チツと舌打ちの音がした。

自分の部屋に入ると、携帯電話を取り出し、横にしてテレビモードにする。リビングにある大きなテレビを香澄に取られてから、この小さな画面が唯一の俺のテレビ。結婚するまで知らなかった。夫

婦の間で、部屋の陣地争いが起こることになるなんて。そして、ほとんどの領域を妻に奪われることになるなんて。

そんな時に会ったのが彼女だった。毎晩部屋にこもってイヤホンで聴いていたキタユウカの曲。雑然としたカラオケの部屋の中で、少し切ないメロディーが俺と彼女の間だけに降り注いでくるように思えた。俺以外にこの曲を知っている人がいる、と隣の席になった偶然に感謝した。

ガチャ。夜更けに香澄が家を出て行く音だ。玄関に近い俺の部屋からは、どうしても聞こえる。何も言わない。むしろ、彼女に電話ができる、と思った。

「珍しいね。家から電話かけるなんて」
夜遊びに出かける人間を誰も妻だなんて思わない。ルームシェアみたいなものだ。今更、離婚する気力もない。新しい生活を始める労力をかけるよりは、このまま購入したマンションに住み続ける方がはるかに楽だ。香澄もそれは同じだろう。干渉しない人間が一人、家の中にい

るだけだ。

「どうして連絡しないなんて言うの？
そう言われるのが私の一番いやなことだ
って分かっているのに」

まるで学生時代の恋愛のように、離れていても彼女の行動を把握したかった。誰かに奪われたくなかった。狭い陣地のなかで泥だらけになりながら、もがいてようやく見つけた小さな鉱石。でも、彼女と一緒にいればいるほど、妻のいる自分に負い目を感じないわけにはいかない。どう考えたって、彼女には俺よりも良い人がいる。その揺らめきは、彼女への束縛と解放に向かう。

じんじんと響く蟬の声が勝手に耳から入ってくる。額から溢れてくる汗をハンカチで拭いながら、出張先の大阪に向かう新幹線に乗っていた。

「週末の出張って、土曜日だけが仕事でしょ。一泊して日曜日は観光しようよ」
言い出したのは、彼女だ。女性と旅行

なんていつ以来だろう。土曜の夜、大阪の外れの小さな駅で待ち合わせをした。

「花火したいな」

彼女は子どもみたいにへへっと笑う。コンビニに寄って花火とライターを買うと、ホテルの近くで花火のできそうなところを探す。公園に目がとまる。「火気厳禁」と貼り紙はあるが、まあ、誰かに何か言われたら逃げようか。砂場とすべり台しかないような、小さな公園に入る。

彼女はライターで花火の先に火を点けようとする。何度もジッジッと親指を擦る。

「今またバカにしたでしょ」

してないよ。ライターを奪い取り、一発で火を点けると、ひらひらした紙の先に炎を移した。激しい光がちかちかと散り始め、音を立てて辺りを明るくする。彼女はたどたどしく腕を振りながら、俺の方に笑顔を向ける。俺も点火すると同じように腕を振る。火はきれいな円を描く。しばらく辺りを明るく照らし、激しい光は突然に消えていく。細る花火は焦

げた匂いの棒になる。終わるときは突然だ。音と光がなくなると、二人だけの華やかな夢の世界が住宅街の暗い公園に戻る。

「次はこれ」

彼女が二本の線香花火を袋から引き出す。線香花火の点火は同時でないといけない。寄り添ってしゃがみ、パチパチと小さな音に耳をすませる。丸い火の粒が、今にも落ちそうに震えるのをじっと眺める。宙に描かれる細い雷光が次第に小さくなる。

「先に落ちたら、恋が叶わないんだっけ」

彼女が言うと、棒の先の火の粒が激しく震え始めた。俺は長く保たせようとして、思わず棒を傾ける。先端が揺れた瞬間、火の玉が落下し、俺の線香花火が先に消える。

「私の勝ち」

そう言った瞬間、彼女の粒も落下する。ああ、また突然に。彼女は、何も言わずにまた袋から別の花火を取り出した。

彼女にばれないはずがないと思っていた。いつかは言わないといけない、とも。

「奥さんがいるんだね」

ずっと前から知っていたような口ぶりで、そうシンプルに言った彼女は、転勤が決まって別の土地に行こうとしていた。

別れ時だったのかもしれない。

しかし、俺の言葉を待たずに彼女は言った。

「別に、私は結婚したいなんて思っていないから」

彼女にとって、これは恋なのだろうか。

3. 回遊

また、この季節が来る。肌を焼き尽くす日差しを避けるように、電信柱が落とす影に立ち、静は信号の青を待つ。

結婚していく友達をうらやましいとは思っていなかった。次々に友達が巻き込まれていく出産や子育ても、自分とは関係のないところで起こっている戦争のよ

うに聞き流していた。自分が一人で暮らしていければそれでいい。趣味はないし何かに熱中したいとも思っていない。だから、眞人が現れたとき、静はその恋愛が自分の全てだと錯覚してしまった。

「離婚しないの？」

「しないよ」

「どうして？」

静が問うと、眞人は何でもないことのように答える。

「別に、理由はないけど。……しない」

信号が青に変わる。ふと顔を上げると、むらのないきれいなブルーの空が広がっている。白い羊毛の塊のような入道雲がゆっくりと上へ動いていく。

転勤先の職場にも慣れてきた頃、同じ系のメンバーで、先輩の行きつけのパーに行った。狭い店で、カウンターとテーブルに分かれて座る。気づいた時には、先輩とカウンターで二人きりになっていた。転勤してすぐから先輩に言い寄られ

ていた。うまく断ることもできず、ブライベートも仕事も、静の体も支配されていき、そういう関係が面倒だと思っていた頃だった。

「マスター、新しいバイトの子？」

カクテルを振るマスターの横で、皿洗いをしている男の子がいた。マスターは透き通った赤いカクテルをグラスに注ぐ。「大学生なんだってさ。お前、何の研究してるんだっけ？」

長い髪で隠れた目が、その問いかけに反応してふいに出てくる。

「……シエアレオネ」

「え、何？」

先輩が言うと、マスターが答える。

「アフリカの国だってさ。行ったことのないのに研究してるんだよな」

男の子が苦笑いを浮かべると、八重歯が出てくる。行ったこともないのに、どうしてその国を調べるのだろう。そう考えるうちに、静は、小さな歯と男の子の不思議さに魅了されていくのを感じる。

恋が始まるのはそうした瞬間で、恋が

終わるのは一瞬の積み重ねだ。静は転勤後もいろいろな恋をしていたが、一方で眞人ともずっと連絡を取り続けていた。彼氏ができると、眞人は言う。

「静ちゃんはモテるからね。寂しいけど、仕方ないよ。幸せになつてね」

しかし、眞人はいつも計ったように良いタイミングで連絡してくる。

「彼氏とうまくいってるの？」

静は言う。

「いろいろあつて、別れちゃった」

恋人がいるからといって幸せなわけではないのだ。結婚したからといって、悩みがなくなるわけではない。何かを達成するとまた別の悩みが出てくる。その繰り返しだ。

そうしたとき、眞人は静の心の隙間を埋めようとする。

「俺は今でも静ちゃんのことを愛してる」

これは恋なのだろうか。結婚を介さない、単なる恋の遊びなのではないだろうか。静はそう思うことがある。恋と恋の

狭間の一瞬のお遊びだ、と。一方で、何が起ったとしても、ゴールが見えなくても、いつまでもずっと誰かを想い続ける恋もあるのではないか、とも思う。

横断歩道を渡り終えると、静は振り返る。歩道の反対側の雑踏に、見慣れた背格好のスーツ姿を見つめる。

眞人は静をじっと見ていた。一緒にいられなくても、遠くに離れていても、静のことをずっと見つめている。

——愛している。

誰かのことをずっと想い続けることは可能なのだろうか。想い続けられなければ、それはただの恋遊びなのだろうか。

二人を挟む縞模様は、太陽の熱をはね返そうと燃える。アスファルトの黒からゆげがにじみ出るように、ぼやけた生温かい空気が漂う。眞人の像が、歪んでいく。

これは、恋なのだろうか。

惨めだったのか。他人も、自分も不幸
せなやつだと思っていたのか。そうかも
知れない。しかし、子供の頃から、ポケ
ットに星屑をつめていた。いつもこころ細
い時にはポケットのなかの闇をまさぐっ
た。明るい絶望というものだってあるの
さ。真暗なポケットに宇宙があり、希
望の星はそのうちに太陽系に飛びだ
す。うつむいて歩きながら、そう考えて
いた。あの頃、辛さと屈辱を味わったは
ずなのに、いまは懐かしい。たぶん人
にとって大切なことはポケットの中の星屑
なのだ。

浅井慎平「ポケットに星屑を」

Philosophy of Stardustbooks

——文化系の趣味を持つ人々をつなぎたい。

「自分と似た趣味を持つ人が世の中に存在しているのだろうか？」

そう思ったとき、手にとった雑誌が教えてくれた。

“あなたは、一人ではない” 自己表現して、セカイとつながる。

スポーツが好き。アウトドア
が好き。決して嫌いなわけでは
ないけど、たまにみんなとノリ
が合わないときがある。

小説が好き。映画が好き。漫
画が好き。でも、オタクと呼ば
れる人たちとは少し違う気が
する。

ひとりで考え込み、ノートに
書きつけ、誰かと出会いたいと
試行錯誤を繰り返す。

そんな人たちがつながり、自
己表現する場をつくりまします。

星屑書房
STARDUST BOOKS

星屑書房は文化・芸術活動を推進する団体です。

stardustbooks@live.jp <http://stardustbooks/soragoto.net/>

編集後記



天沼 太郎

創星第一〇号おめでとうございます！
一〇号続いたのも、いちろさん、鳩山さん、参加される皆さんの努力の賜物です。次は二〇号、そして五〇号、一〇〇号と続けられたら最高ですね。
感想・ご意見はdoguramagura71@gmail.comまで。



衣 空

二〇一四年はサッカーの年でした。
ミランのファンだとうとうと本田のファンと思われそうです。二〇一四年近くファンやっています。
そして一番好きなのは、選手時代から二〇一〇年近くずっと好きなインザーギ監督です。



松田 定幸

今回、初参加と相成りました。サークル名と誌名から、星に因んで星座モチーフのイラストを描いております。天馬ヘカサスの絵になったのは、執筆・編集・発行が午年であることからです。
どうか何とぞよろしく願います。



間々えいよ

初めて参加します。
寒くなつてうれいのは、猫がよく近づいてくれること。猫を抱くとモフモフして暖かい。
貴族の肖像画のように、ナデナデしながら外の様子を見るのがなんとも最高。
冬っていいな。



坪井 希

今回と同じ土台で別の話を出してもいいかも。
書きたいものが徐々に変わってきた気がします。
投げず忘れず細々と、精進していく所存です。



馬場 貴生

僕は適当が好きです。
本当は整合性とかどうでもいいのです。



竹中 優子

今回から☺をやめて本名を使うことにしました。
旧鳩山豆子です。メンバー紹介の企画、想像以上に濃い仕上がりになりました。星屑の活動にちよつとも興味がある方はお気軽にご連絡ください！



To's job

心機一転、原点に戻って
油絵を始めようと思っています。



一路 真実

昔の自分とはあらゆる意味で大きく変わってしまったと感じるけれど、なぜ何がどのようにして変わったのか、思い出せない。だけど、目の前に並んだ一〇冊だけは時が流れていることをちゃんと証明してくれる。



天沼 太郎

ご利用は計画的に。



マチコ・ラスメニナス

先日街を歩いていたらスカウトされました☆
「新しい人材を募集しています！」
とスカウトマンから手渡されたチラシには、
《ヤ●ルトレディ募集中》という文字がありました。

★星屑書房は好き勝手に表現活動をしていく文化系サークルです。
現在は、フリーペーパーの制作・配布が中心ですが、今後は幅広く、文化系活動をしていく予定です。本を読むことが好き。本を自分で作ってみたい。
映画を観ることが好き。映画を撮りたい。・・・などなど、
文化系趣味を持つ人々をつなぎます。社会人が中心ですが、誰でも入会OK！
「こんな活動してみたい！」という提案募集中☆
少しでも興味を持たれた方はこちらにご連絡ください！
↓↓↓↓ stardustbooks@live.jp お待ちしています！

創星

第10号

2014年10月26日 初版

発行元 **星屑書房**

<http://stardustbooks.soragoto.net/>

©2014 STARDUST BOOKS, Printed in Japan.

本書を無許可で複写・複製することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。



星屑書房 
STARDUST BOOKS